

# 郷土室だより

## 中央区の海岸線

(その7)

以下、先号(73号)で書き切れなかった話をつづけます(先号でも述べたように図のD・E・F・Gに關した事柄です)。

◇本願寺の話 図で見ると、都営地下鉄浅草線の人形町駅Cと、東日本橋駅Eのちょうど中間の地点Dの東側に「本願寺御堂」がありました。現在の町名では浜町一〜三丁目にかけてあたりだといえましょう。

さらにこの「御堂」を中心に多くの寺があったことがわかります。

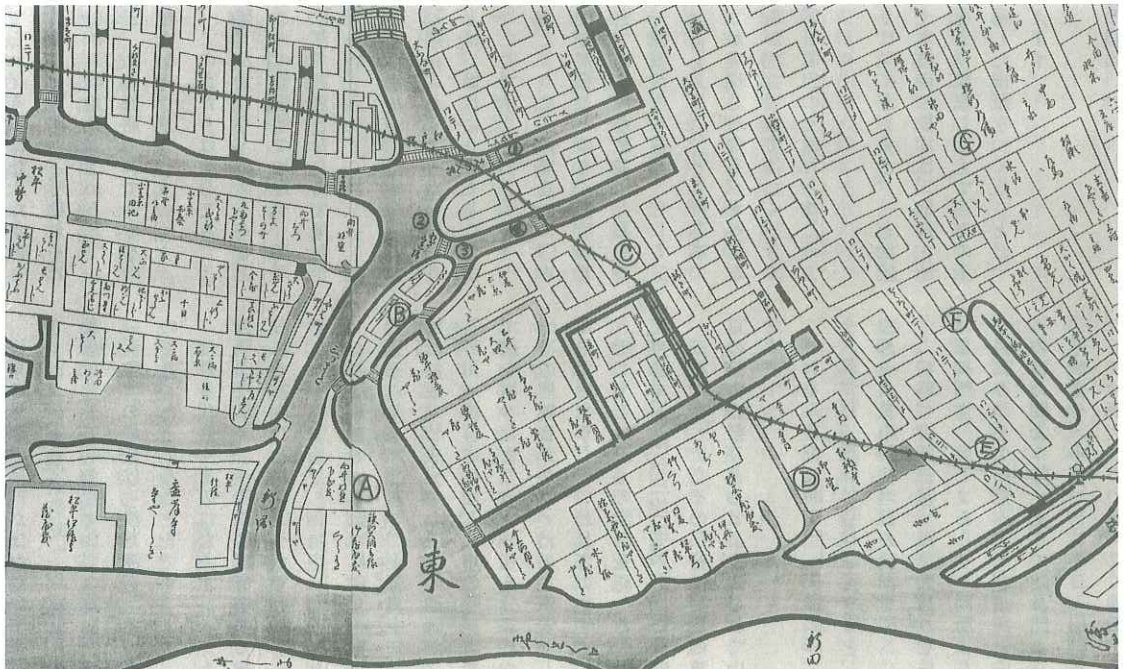
江戸の地誌の中では最も古い部類にはいる『江戸砂子温故名跡誌』(俗に「江戸砂子」 享保一七年―一七三二に成立、著者菊岡沾涼)を見ますと

○西本願寺 築地。京都より輪番。

元祖上人より顕如上人までは一本寺なりしが、天正の頃故あって東西二派にわかれる。当寺を表門跡と云。御入国のみぎり浅草ばしの内に寺地をくだし賜ふ。明暦以後此所(引用者注)築地の現在の場所)にうつさる。はじめは干潟の海なりしが、筑たてゝ寺地となる。

塔中之分 称揚寺 善永寺 妙延寺 実相寺 円正寺 浄見寺 法照寺 法重寺

- 浄立寺 法
- 光寺 成勝寺
- 円光寺 善
- 久寺 西念寺
- 善照寺 覚
- 證寺 善正寺
- 安養寺 真
- 光寺 常栄寺
- 散覚寺 久
- 宝寺 長泉寺
- 浄光寺 善
- 林寺 福泉寺
- 真教寺 浄
- 念寺 正法寺
- 応善寺 明
- 西寺 延浄寺
- 妙善寺 光
- 源寺 妙泉寺
- 正満寺 浄
- 泉寺 正善寺
- 長安寺 真
- 竜寺 宝林寺
- 海岸寺 万
- 福寺 西照寺
- 万行寺 報
- 身寺 正覚寺
- 勝林寺 浄
- 徳寺 光西寺
- 延重寺 源
- 正寺 福称寺



妙覚寺 唯信寺 光徳寺 円徳寺  
と、五七軒の子寺の名称があげられて  
います。

この記事をおぎないますと、天正の  
ころ本願寺が分裂したこと。「御入国  
のみぎり」というから、家康が江戸に  
来たときに浅草橋門内、つまり図のD  
の場所に寺地をもらったこと。そして  
明暦大火（一六五七）で焼けた後に、  
築地の現在地に移ったとあります。

分裂したもう一方の大谷派の方を同  
じ『江戸砂子』で見ますと

○東本願寺 御表 京都輪番。

開基教如上人。此上人は豊臣太閤の  
はからひとして、御舎弟順如上人を  
本寺の門跡にし給ひ、教如上人は裏  
やしきに隠居ありしを御召出しあそ  
ばせ給ひ、六条室町の末に御堂御建  
立ありしより、西東の本願寺と成。  
御うらといふも裏屋敷におわせしゆ  
へなり。

御当地（江戸では）神田に御堂造  
りあり、明暦年中当所〔現台東区西  
浅草一丁目の東京本願寺〕にうつる。  
その旧地は神田明神下、今加賀やし  
きといふ所なり（後略、「」内は  
引用者）  
とあります。

このような『江戸砂子』の記事にも  
かかわらず、実際に准如が現在の浜町

公園のあたりに寺を建てたのは、家康  
が没してから六年後の元和七年（一六  
二一）三月のことでした。

そしてこの寺のことを「江戸海辺御  
坊」または「浅草海辺御坊」、のちに  
は「浜町御坊」と呼ばれたと、西本願  
寺築地別院の「創立并縁起」（明治三  
四年―一九〇一）にあります。

そしてその当時の有様の“地形”に  
関する個所だけを紹介しますと

（前略）又大なる庭園を有し、汐  
入りの池ありて、船を繋ぎたるは、  
当院に九代奉仕する虎の間詰正木新  
吾翁の所蔵の古図にて知らるゝ也。

（後略）

と書いてあります。なおこの古図と  
同じものかどうかはわかりませんが  
『新撰東京名所図会 京橋区之部』  
（明治三四年刊）に「江戸浜町御坊正  
図」と題した図が掲載されています。  
しかしその題名につづいて「寛延二巳  
ノ年（一七四九）迄八十九年ニナル」  
とあるのですが、その意味がわかりま  
せんのでただそのことを紹介するだけ  
にします。

#### ◇「浜」が「浜町」に

このような本願寺に対する呼び方の  
変化は、海辺を意味する「浜」に寺地

を割り当てられ、そこに壮大な堂舎を  
建てて、やがて「浜町」と呼ばれるは  
どに、人為的な陸地化が進められてい  
った有様が、よく物語られているもの  
といえましょう。

しかし、このあたりは前号でみたよ  
うに「N値」が大きく、いいかえると  
グシャグシャの低湿地ではなく、江戸  
の海岸では江戸前島とやらんで地盤が  
よい場所でした。

地盤が良くなければ、当時の技術力  
では庭園に船が入れるような「汐入り  
の池」などは、簡単にこさえることは  
できなかったのです。

すでに見たように江戸前島に一〇本  
の「舟入堀」が掘れたのも、浜町の北  
側の地続きである浅草蔵前に、幕府の  
米蔵用の一番堀から八番堀、そして三  
味線堀の出口を含めれば合計九本の  
「舟入堀」が実現したのも、すべてこ  
れらの場所が埋立て地ではなく、日本  
橋台地と同じ成因の土地だったためで  
す。

このように見えますと、一七世紀  
の日本の土木技術の根本は、地形・地  
質の実態をよく観察した上で、その土  
地に最も適した施設をつくることだっ  
たともいえます。

#### ◇浅草との関係

浅草の米蔵、蔵前が出たついでに、  
さきの「浅草海辺御坊」の「浅草」の  
意味を考えてみましょう。つまり今の  
「浜町」の場所は「浅草海辺」そのも  
のであったということをです。

浅草を代表するのはなんとといっても  
金竜山浅草寺、「浅草の観音様」で知  
られていることは、いうまでもありま  
せん。

この浅草寺の『寺伝』には、「推古  
天皇三十六年（六二八）、土師真中知と  
檜熊浜成・竹成兄弟の三人の漁師が、  
宮戸川（浅草寺に面した川の呼び方）  
で網を打ったところ、一寸八分（約六  
cm）の聖観音がかかったのを奉安」し  
たのが始まりだといわれています。  
そしてこの三人の漁師を祀ったのが  
江戸時代には「三社権現」、いまの  
「三社神社」で、その祭礼は初夏の東  
京の最大の祭りとしてよく知られてい  
ます。

これを『東都歳時記』（天保八年＝  
一八三七刊、斎藤月堂著）で見ますと、  
三月一八日の祭礼当日の状況を、

（前略）神輿三基 浅草大通りを浅  
草御門迄 渡しまあらせ 同所より  
舟にうつし大川筋へ出 花川戸と山  
の宿の間より陸へ上りて隨身門より  
還輿あり（中略） この日 旧例と  
して六郷大森等の村々より獵船を出

し 彼地の漁人来りて神輿を供奉す

むかし宮戸川の辺に住し「たる」

漁人 後に大森等へ移る故に いに

しえを忘れざるの意なり（後略）

とあって「三社権現」の神輿が舟に

乗って、浅草方向に漕ぎ上がっている

絵がつけられています。

三台の神輿が舟に移された地点は、

いまとなつては確定できませんが『東

都歳時記』には「浅草御門迄」とあり

ますので、少なくとも現在の中央区と

台東区の境の辺だったと思われま

す。いいかえると浅草橋門を中心とした一

帯までが浅草だったのです。

◇浅草川とスミダ川

このように「浅草」の範囲は現在よ

りもかなり広く、その上にすくなくと

も家康が江戸に来た天正一八年（一五

九〇）から、約百年後の元禄期までは

江戸に関する公文書や地図で見る限り、

いまのスミダ川と呼ばれている川は、

「浅草川」と呼ばれていました。

しかし本来の「浅草川」の上流は、

はるか北方の大宮台地から埼玉平野を

流れて、いまの隅田水門―旧綾瀬川―

鐘が測と流れてきた「古隅田川」と、

秩父地方から流れてきた荒川の二本の

川でした。

いまはこの「古隅田川」も綾瀬川も

すっかり忘れられて、わずかにかつて

の流路のあとを地図の行政区画の線に

残すだけです。

荒川の方も「秩父のさらに山奥の武

蔵国と信濃国の境に源流を持つ」川と

いうのが「常識」ですが、実は寛永六

年（一六二九）に幕府が川越と江戸を

結ぶ入間川の水運を開発するために、

荒川を現在の熊谷市の南西部の佐谷田

から入間川に流れをつかえたもので

した。これが有名な「荒川の瀬替」と

呼ばれるものでした。

佐谷田から下流の「頭」を入間川に

取られた荒川は「元荒川」と名を変え

て、大宮台地―埼玉平野―東京湾と流

れました。これらの流路の細かい説明

は省略しますが、元荒川の流域は中央

区を走る地下鉄日比谷線に続く東武伊

勢崎線の沿線に当ることは、有史以前

の原地形が現代の都市交通の路線に大

きな影響を与えている例の一つとして、

とても興味深いものを覚えます。

いささか脱線してしまいましたが、

ここで確認したかったことは、「浅草

川」の原型は入間川と「古隅田川」綾

瀬川」だということでした。

そしてこの二つの川の合流点が七世

紀ころは海の入江であり、武蔵国最古

の浅草観音はその入江の一角に創立さ

れたものと考えられます。

「浅草海辺御坊」の広大な庭に「汐

入りの池」が掘られたことは、すでに

見たとおりです。「汐入り」とは海水

が満潮時には河川の流路にさしのぼっ

てくる現象をさしたことばです。いま

も中央区内には浜離宮庭園の「汐入り

池」をはじめ、日本橋川・神田川のか

なり上流まで、一日に二回この汐入り

現象がみられます。

ふたたび、「浅草川」にもどります

と、浅草観音の北側、現在の荒川区南

千住三、四、八丁目一帯は、かつては

「汐入地区」とよばれていた地区です。

いまでも「汐入」をつけた公園、都営

住宅、郵便局、保育園などがあります。

そのむかし佃島の漁師が将軍に献上

用の白魚を取るため、この汐入地区は

もちろん、現在の北区のあたりまでさ

かのぼって網を入れていたのは、汐が

差し上げる範囲を物語るものでもありま

した。

それはさておきこの荒川区の汐入地

区に胡録神社があります。この神社を

中心にした一帯は江戸時代？明治中期

まで、胡粉の産地として有名でした。

胡粉とはカキの貝殻を焼いて生石灰

にしてから、白色顔料にしたもので、

絵具・塗料・建築材料など、広い用途

があったものです。今でも、張り子、

の人形やだるまの下地にかなり使用さ

れています。

この胡粉の原料になる蠣殻は、汐入

地区から荒川ぞいに尾久・中里あたり

まで非常に広範囲に分布しています。

その有様の一例をまた『江戸砂子』

で見ますと

蠣殻山三河島にあり すこしき山

なり 悉く 蠣殻なり むかし此辺入

海なりしと云伝ふ 数年此山の蠣殻

を取りしかども尽すと云ふ

とあり、同じような記述は江戸時代

の地誌のどれにも見られます。

東京の市区改正事業における市内の

河川の護岸工事の技師だった菊池山哉

氏はその著『沈み行く東京』・『東国

の歴史と史跡』などに、「大正二、三

年の三河島下水処分場の工事現場で蠣

殻ばかりの貝塚二カ所が出たこと。魚

河岸や蠣殻町などにはそれぞれ長さ一

丁（約一〇八m）、厚さ四〜五尺（約

一・三〜一・五m）の蠣殻層があった

ことを述べています。

また『千代田区史』には北区の中里

貝塚の三m近い蠣殻層地帯の発掘調査

記録があります。

中央区の蠣殻町という町名は、多く

の地名由来を説明した本には、ほとんどまともな説明がされていませんが、菊池山哉氏にはじまった東京の「理工学」的観察によれば、すでに大正のはじめから東京の旧入江地帯には「自然貝層」ではない「貝塚」的な蠣殻層が多かったことが指摘されているのです。

中央区の蠣殻町のあたりは、前号までに再三のべてきた旧石神井川の河口に当たります。カキが繁殖するのに好都合な気温・水温・汐入りの状態が続いていた時代には、蠣殻町のあたりは縄文時代人の食料の宝庫だったのかも知れません。

#### ◇埋め立て時代

ふたたび「浜町御坊」と呼ばれた西本願寺にもどります。明暦三年（一六五七）一月一八、一九の両日の「明暦大火」で、家康入国以来六七年間かかって建設され続けた新興都市江戸は、ほぼ全焼してしまいました。

幕府はこの大火の復興計画を立てました。一つは市街地の再構成であり、一つはそれともなう市街地の拡大でした。はじめの再構成については一つは江戸城内にあった大名・旗本などの屋敷を城外に移すことであり、一つは城の周囲に集められていた幕府の施設

（米蔵・材木蔵・竹蔵・舟蔵などの倉庫）を、城から離すことでした。もう一つはそれまで市街地としてはあまり条件の良くない場所に集中して造らせた寺院を、江戸近郊に移すことでした。この三つの方針にはそれぞれ理由があったのですが、ここではそれは省略します。

そのため必然的に江戸の市街地は拡大しました。その広がり方は第一に隅田川以東の沖積地の開発であり、第二は焼跡の残土片付けを兼ねた江戸前海の埋立てでした（この方法は六九号で取り上げた戦後の三十間堀川の埋立てと全く同じ発想だった点が面白いところですよ）

その結果、本所・深川が本格的に市街地となり、ほどなく両国橋（万治二年＝一六五九に竣工）を必要とするまでに発展しました。また浅草橋から浅草観音まで、町並みがとぎれずにつながったのもこの時期のことでした。そして第二の海岸の埋立て状況を代表するものが、西本願寺の場合でした。

「浜町御坊」が焼けた約三ヵ月後の五月四日（神社奉行の発令日は六月七日）に、西本願寺は「八町堀築地海涯」に寺地百間四方を与えられました。与えられたといっても、当時の「与えられ」方は大名も寺院も幕府から場

所と面積の指示を受けるだけで、あとは自力で「宅地造成」をするという方式でした。

百間四方といえは一万坪（三万三千㎡）分ですが、献身的な信徒の努力で二七％増の一万二七〇〇坪も造成してしまい、結局そのまま「拝領」（将軍から貰うこと）してしまいました。

その上、翌年の五月二十七日には本寺の堂塔の建築はもちろん、先にみた五七軒の末寺も全部完成して軒を並べるといって、現在から見ても非常に速いスピードの建設によってでき上り、「浜町御坊」は「築地御坊」と改称されて現在まで続いています。なお昭和四十一年に刊行された『佃島年表』（京橋図書館編）には、この時の工事に際して「西本願寺の築地移転に際し、佃島門徒地形築立に尽力、西本願寺の有力な門徒となる」とあり、昭和七年（一九三二）の項には「佃島有志、本願寺和田堀廟所に「佃島祖先由来之碑」を建立」ともあります。

#### ◇築地いろいろ

この「八町堀海涯」の本願寺埋立地を中心に、北は八町堀舟入堀（いまの埋立てられた桜川のこと）から、南側は「芝口海手」の現在の浜離宮庭園ま

での海面は、多くの大名・旗本の宅地として急速に埋立てられて行きました。現在の築地地区の南端の浜離宮庭園

（五万八千坪）は、明暦大火の五年も前の慶安五年（一六五二）八月に、家光の三男の徳川綱重が下屋敷として与えられたもので、江戸前海の大規模な埋立ては、すでにこのように明暦大火前から始められていたのです。

それはさておき、江戸にはいくつかの築地がありました。ここで扱っている築地にしても「八町堀海涯」の築地、または「八町堀築地」、「木挽町築地」、「鉄炮洲築地」などの区別がありました。

築地とは水面を築き立てて陸地にした場所を意味するものですから、中央区の築地は八丁堀・鉄炮洲・木挽町それぞれの埋立地を足場にして、さらに海の沖合を埋め立てたことがわかります。

同じように「赤坂築地」は港区にあった赤坂溜池の周辺を埋立てた場所でしたし、文京区内には白山通りにあった「小石川築地」（一名「築地馬場」）が知られています。新宿区には赤城神社のある赤城元町の北側の低地が「築地町」。赤城元町の東側には筑土八幡が鎮座する筑土八幡町もあるという具合です。

築地は水面や低湿地の埋立地、筑土は陸上の地盛りといったニュアンスの違いがわかります。

さらに江東区の深川地区では、「深川築地町」といった場合は、「深川二十四カ町の総名」を意味する呼び方として通用していました。

明治になって築地のさらに沖合いに月島が造成されました。本来は「築島」の意味でしたが「築」を「月」にした風流心は、現在のICの先き駆けだともいえます。

◇E 東日本橋駅・F 馬乗馬場

前の『郷土室だより』七三号で見たように、都営浅草線の工事中は関係者は東日本橋駅の地点を「久松町」または「仮称久松町駅」と呼んでいたようです。この久松町は享保江戸図(一七二五)にあるほかは他の図には見えない小さな町でした。それはさておき、『武州豊嶋郡江戸庄図』ではEの地点は常磐橋から本町一〜四丁目、大伝馬町一〜三丁目、油町、塩町と続く、江戸最初のメイン・ストリートの「本町通り」の町並みの横山町二丁目あたりを相当します。ところがこの横山町は油町に続く町が三丁目、そして二丁目、一丁目が浅草橋側になるのです。つま

り町並みの向きが横山町に限って逆になるのです。

この本町通りのひと筋北側の現在の「江戸通り」の場合は石町一〜四丁目、鉄炮町、小伝馬町一〜三丁目、馬喰町一〜三丁目と常磐橋方向から丁目が順に並んでいます。多分私が見ている『武州豊嶋郡江戸庄図』の「誤記」だと思っのですが、ここではそのことだけを述べておきます。横山町という町名の起源はあまりよくわかりません。

馬喰町二〜三丁目の北側に「馬乗馬場追廻し」と書かれた「馬場」があります。その幕末の有様は「江戸名所図会」の中の「馬喰町馬場」にあります。馬が一匹も見えない風景なのでガツカリです。『東京府志料』によると、三丁目西北裏通りに馬場あり。初音の馬場という。博勞頭富田半七、高木源兵衛なる者、草創にて此馬場を掌る。故に博勞町と名付けしを正保の頃(一六四四〜七)馬喰の字に改むという(中略)此の地、旅店多し。

此の馬場昔、関ヶ原役の時、馬を此所に揃へしと云。其周囲に土を築きて中に又一帯の小土手を築く。大輪に乗り廻せしなり。明暦大火の後、今の如く一筋の馬場に改めしと云う。とあります。

◇G 神田薬師・遊行道場

この馬場の北側に面した一帯は、神田北寺町とも呼ばれた「寺院団地」でした。『武州豊嶋郡江戸庄図』には、ちぞう院、唯念寺、法セン寺、弥勒院、ゑんをふ坊、聖徳寺、常安寺、ゼン国寺、願行寺、しゅぜん寺、天覚院、雲光院、本ぜん寺、水清寺、大せう寺、せんかう寺、そしてほぼ現在の地下鉄岩本町駅辺にあたる場所に神田薬師・遊行道場、そして少しはなれて後に護持院になった知足院などの寺の名が読みとれます。

これらの寺の大半は江戸城周辺にあったもので、天下普請で城が拡張されるたびに、この辺に移されて寺町を形成したのです。これらの寺がどこからこの地に移されたのか、また明暦大火後にどこへ移されたかは、大部分がわかってはいますが、ここでは省略して代表的な三例を紹介することにします。神田薬師(医王山東福寺)は今の皇居平河門付近から駿河台に移され、さらにこの場所に移され、明暦大火後は上野に移り、そののち麻布とはほとんど江戸中を転々と移動しました。遊行道場とは現在千代田区大手町一丁目にある平将門の首塚の所にあった神田山日輪寺(現在は台東区西浅草三

丁目)のことです。将門の亡霊を供養した時宗の踊念仏の柴崎道場が、この遊行道場のことでした。

浅草橋寄りの雲光院は現在は江東区三好の寺町に移転しています。昭和五十一年に都立一橋高校の改築の際、この雲光院とその地続きからおびただしい人骨が発見され、それを機会に初めて東京下町の江戸時代遺跡に本格的な考古学的手法による発掘調査が行われました。

海岸線の話がこのような寺院の事になったわけは、この神田北寺町中央区の北部と千代田区東部を含む一帯は旧石神井川が形成した入江だったか、からです。この入江が俗に神田お玉が池と呼ばれた「池」で、もっと上流には上野の不忍「池」もありました。

江戸初期の町づくりの方法は、海岸や汐入りの低湿地、内陸部の谷間などのジメジメしている場所、つまり宅地としては不適当な場所には、必らず寺地、墓地をつくらせています。今のようには大量のゴミや産業廃棄物がなかった当時は、人の遺体や墓石はもっともカサのある埋立て材料でした。平均二、三〇年ほど墓地にしておきある程度土が固まると、そこを市街地にすると、また寺を江戸郊外の低湿地に移すということを繰り返したのです。

そしてこのような手法があったことを側面から証明してくれたのが、本誌七〇号でとりあげた、骸骨の先生「川越逸行先生の調査結果だったのです。

#### ◇八丁堀の場合

このような事情と同じことが八丁堀埋立地にもいえました。『武州豊嶋郡江戸庄図』にみる八丁堀の全貌は七一号に掲載してありますが、念のためその範囲を現在の町名でいいますと日本橋兜町、日本橋茅場町一〜三丁目、八丁堀一〜四丁目および亀島川をへだてた新川一〜二丁目に相当します。

そして八丁堀寺町はこの範囲の約八〇%を占めていました。新川地区——住居表示以前は霊岸島でしたが、その名の通り、始めは全部が僧靈巖が築かせたものでした。『江戸砂子』には次のように書かれています。

（前略）江城の東渚に大伽藍を建立せんと、あまねく四衆を勧進して、土一簣をはこび来ル者には則十念をさすげ、また血脈をあたへて結縁せしめ、不日にして広汀変じて陸地となる。今の靈巖嶋是なり（後略）

西本願寺と同じように信徒が「み」一杯ずつ運んできた土で埋立地を築

いた様子が、簡素な文章でよく表されています。この寺も明暦大火後、現在の江東区に移されました。

七一号の地図の左端に江戸前島の旧海岸線の湊に通じる水路として「八丁堀舟入」があります。一町は六〇間ですから約一〇八m、八町で約八七〇mという長さは、旧桜川の白魚橋から亀島川水門までの距離に相当します。

はじめこの水路は両側に杭を打った程度のもので、次にその杭の列の上をつないで土手をつくり、さらにその細長い土手を足場に両側を埋め立てていったのです。七一号の地図で見ると、八丁堀の北側の方が埋立が早く進み、南側の方は「築地御坊」埋立ての時の「八丁堀海涯」という表現のように、図のようにまだ棒状の土手だったことがわかります。そしてその土手の上に細長い町地も書かれています。

そして図の時点から二一年後の承応江戸図（一六五三）には南側の土手が延長されて鉄炮洲が出来ています。そしてその先に入船が描かれています。鉄炮洲とはこの沖合の突堤が銃砲の絶好の試射場になったところからつけられた名です。

そして鉄炮洲は年々拡大されて行き明暦大火の年には本願寺のすぐ北側まで陸地つまり「鉄炮洲」になっている

ことが、明暦江戸図でわかります。

八丁の町は長さの町であり、丁は町の一丁目、二丁目といった算え方の八丁です。八丁堀とは長さ八町の水路であって、町の丁目とは意味が違っていたのですが、いまはすべて八丁堀になってしまいました。

この「八丁堀船入」という水路の役割は、大航海時代の当時、無闇に外国船が主要港の奥深く着岸することを防ぐための仕掛けで、江戸だけではなく外国の港の場合も共通な港湾施設だったのです。

また江戸にはもう一つの「八丁堀」がありました。それは十返舎一九の『東海道中膝栗毛』の「発端」で、主人公のヤジさんキタさんの紹介のところで、彼らの住居が「神田の八丁堀」だとあります。神田の八丁堀とは中央区と千代田区の区境にあった元禄三年（一六九〇）に町人によって掘られた水路のことで、竜閑川とも呼ばれその東端で浜町川につながった水路をいいます。

しかし『考証江戸切絵図』（綿谷雪著 三樹書房 昭和五十七年刊）には（前略）この三代町は池田英泉の『楓鑑古蹟考』に「俗ニコノヘン神田八丁堀と云」とあって、すなわち十返舎一九『東海道膝栗毛』の主人

公弥次・喜多の居住地に仮托されたのはこの町であるが、従来の諸注釈書はずいぶんといふ加減なもので、一つとして正しい場所を書いていない。中には今川橋へんだなんて、いかげんな推測を書いてすませていく学者があるのは、あきれ返ったものである。

と述べています。同書によれば三代町は「現在の兜町三丁目の全区域にあたる」とありますが、さてどちらをとるか迷うところです。七回にわたったこの連載もこれで終りです。ご愛読ありがとうございました。三芳 亘

#### ——次号（第76号）の予告——

「私の見た昭和の日本橋・京橋の移り変わり パート2」

川崎 房五郎 氏

（江戸歴史研究家）

去る9月28日に行われました、第64回「東京を語る会」の講演内容を、おとどけます。

当日いらっしやれなかった方だけでなく、一度聞いた方にとっても、大変参考になるお話だと思っております。どうぞお楽しみに。尚、パート1については、第74号をご覧下さい。